

## ルソー「学問芸術論」の背景：ディジョン・アカデミー

永田，英一

<https://doi.org/10.15017/2332906>

---

出版情報：文學研究. 49, pp.77-90, 1954-07-25. 九州文学会  
バージョン：  
権利関係：

## ルソー「学問芸術論」の背景

— デイジョン・アカデミー —

永 田 英 一

ルソーの「学問芸術論」<sup>1)</sup>は、周知のように、一七五〇年度のデイジョン・アカデミーの懸賞課題「学問芸術の復興は道德の醇化に貢献したかどうか」<sup>2)</sup>に応じてつくられたもので、その当選は作者を一躍有名にし、同時にこのアカデミーの存在を全ヨーロッパに知らせた特異な事件であつた。そしてこの事件のいきさつについては、のちにルソー自身「マルゼルブ氏への書簡」(一七六二年)や「告白録」(卷八)においてかなり詳しい報告をしている。けれどもルソーの報告には例によつて誇張や粉飾がほどこされ、特に偶然的要素が強調されているようで、なにか伝説的な不確実を想わせる。またデイジョン・アカデミーにしても、あゝした設問の仕方やまた「否定」の解答への授賞などは、アカデミー本来の性格からして、なにか唐突の感をいだかせずにおかない。——そしてこうした疑惑については今までも解明のころみがなされなかつたわけではないが、最近わたしが入手したマルセル・ブーシャル氏の「デイジョン・アカデミーとルソーの最初の論文」<sup>3)</sup>は、もつとも着実なまたもつとも妥当な方法でこの疑問に答えているように思われた。そこでわたしは主としてこの書によつてデイジョン・アカデミーの側から右の事情をすこし紹介して見よう。

- 1) J.-J. Rousseau, *Discours sur les sciences et les arts*.
- 2) *Si le rétablissement des sciences et des arts a contribué à épurer les mœurs*.
- 3) Marcel Bouchard, *l'Académie de Dijon et le premier Discours de Rousseau*, Paris, 1950. 著者はディジョン大学総長でディジョン・アカデミーの常任会員。本書は「ジャン・ジャック・ルソーの名誉とアカデミーの名誉をなしたコンクール」の二百年祭にあたって一九四九年と五〇年に同アカデミーで行われた講演内容を収録したものである。



ディジョンのアカデミーは一七四〇年に設立されたが、その設立の事情からして特異な方向を決定されていた。ブルゴーニュ高等法院の長老エクトル・ベルナル・プーフィエ (Hector-Bernard Pouffier) 氏は一七三六年三月十一日歿したが、同氏がかねてから郷国にアカデミーを設置する計画をもつていて、一七二五年十月一日自筆の遺書においてその設立と維持のために私財の一部をあてることを明記していたのであつた。そしてこれには次のような特殊な事情があつた。

プーフィエ氏はながい前から高等法院の院長プーイエ (Bouhier) にたいして深い嫉妬と敵意をいだいていた。というのはプーイエは高等法院における地位や財産や、また学界における業績、名声からして断然かれを圧倒していたのであつた。プーイエはモンテスキューに先立つてアカデミー・フランセーズに選ばれたほどの法律学者で、フランス全土において当代一流の権威者として輝いていただけに、郷国ブルゴーニュにあつてはまるで「予言者」であつた。その上かれはディジョンの町ではサン・フィアクル街の豪壮な邸宅に同学の友人や弟子をあつめて、この町の知識層の上に王者の権勢をふるつていた。そこでプーフィエ氏はこうしたプーイエに対抗して、その勢威をうばうために、特にプーイエ派の無視していた学問にたづさわる人々の団体をつくることを思いつき、正式に王の認可状<sup>\*</sup>をえたのであつた。

\* この認可状は一七四〇年六月三十日ブルゴーニュ高等法院に登録され、これによつてアカデミーの定款が承認された。

こういふわけでプーフィエ氏の企図したアカデミーの眼目は、ブルゴーニュ高等法院の長老をもつてこの団体の中核とし、物理、医学、道徳の三部門を設けてそれぞれの部門に属する会員の研究を助成することであつた。そしてこのことは同氏がみづからアカデミーに課した定款のなかに明確にうたわれている。われわれは便宜上この定款を簡条がきに要約して掲げてみよう。

一、アカデミーは恒久的に五名の常任幹事 (Directeurs) によつて管理される。但し第一幹事は高等法院の先任評議員 (Doyen) でなければならぬ。(第一、第三幹事も同評議員であるが)、第四幹事は弁護士あるいは検事の最古参者、第五幹事はディジョン市長とする。

一、これらの幹事のほかに、アカデミーは二十四名の会員 (Academiciens) によつて組織される。但し六名は名誉会員 (Honoraires)、十二名は有給会員 (Pensionnaires)、六名は普通会员 (Associés) とし、これらの会員は、当地方の学者において定数にみたない場合を除き、すべてブルゴーニュ公爵領の出身者でなければならぬ。また有給会員と普通会员はすべてディジョンの町に居住し、住所を変更した場合はその席は空席とみなされる。

一、有給会員のうち四名は物理学 (Physique) の諸問題に、四名は人間および社会の義務に関する道徳 (Morale) の諸問題に、また四名は生理学、化学、解剖学、植物学のような、理学に依存する医学 (Medicine) の諸分野に熟達していなければならない。なお普通会员はそれぞれ二名づつ物理学、道徳学、医学を専攻する。

一、毎年、恒久的に、有給会員にかぎりコンクールを行い、もつとも優秀と判定されたものに賞金が授与される。但し、受賞者は物理学、道徳学、医学の各部門においてそれぞれ第一席、第二席の二名とする。

一、コンクールのための論文の作成や、またその提出、審査、判定の時期については別に規定されるが、賞金授与は八月二十日公開の集会において行われる。

一、会員の空席が生じた場合は、弁護士あるいは検事の最古参者二名と市長のみが、高等法院の先任評議員および他の二名の幹事に適当な候補者三名を推薦する権利をもつている。但し、その空席が有給会員である場合は、その席の所属する部門の二名の普通会員が候補者のなかに教えられる。

一、例会は毎週金曜日にプーフィエ氏の居住していた邸宅において開かれ、その都度有給会員は自己の所属する部門に関する研究発表をしなければならない。普通会員も同じく研究発表をすることができる。

このようにディジョン・アカデミーの定款はまことに特異なもので、リシャル・ド・リュフェー<sup>\*</sup>の記録によれば、「王國ならびに諸外国のいかなるアカデミーもこのようなプランによつて組織されたことはなかつた」のであつた。そしてこの定款は必然的に多くの不便、不都合の源泉となつた。会長の地位が高等法院の長老に限られたということは、こうした科学文学のアカデミーとして決して適当な措置ではなかつた。また幹事に絶大な権力が認められたために、会員の入選においても公正を期することができなかつたし、現役の有給会員はその監督の下にまるで小学生の身分におかれたのである。

\* Richard de Ruffey, *Histoire de l'Académie, Histoire secrète.* 著者はこのアカデミー会長。両著はプーシャル氏の

の書のなかにしばしば引用されている。

殊に有給会員にとつて「コンクール」の義務は甚だおもしろくない宿題であつた。かれらは同僚の審査判定をうけねばならなかつたのだ。そこでかれらはこの規定に反抗し、辞職さわぎまで起して、これを變更させた。

「将来かつ恒久的に、毎年一般公衆にたいして交互に物理、道德、医学の問題に関する題目が提出される。そしてその題目をもつともよく論じたものに三百リール相当の金牌の賞品が授与され、残額は有給会員に分配される。」

こうしてコンクールは一般に公開され、有給会員は不快な重荷から免れたばかりか、みづから審判者となる光榮を担つたのである。

けれども、この「コンクール」の規定を除いては、定款はプーフィエ氏の決定したままであつた。そしてそれは独自の拘束力をもつて諸種の弊害をうみつづけた。

「この奇怪な定款とかくも反アカデミックな管理から無数の悪弊が生じた。そして悪弊は相ついで起り、積りつもつて文芸の恥辱となり、ついにこの団体を軽蔑されるかぎり軽蔑させた。これは、もしこの目的のために四千フランを授じた創立者によつて賄われなかつたならば、やがて壊滅したであらう。」(リュフエ)  
(一)の言

實際アカデミーとは名ばかりで、この団体はむしろ「同業組合」であつた。そして人口二万のディジョンの町でさえほ

とんど無視されていた。けれども、これは存続した\*。

\* 定款は一七五九年全面的に改革された。なお前掲の要約はブーシャル氏の著に要約引用されたものを更に摘要したものである。

ところで、一七五〇年におけるディジョン・アカデミーの内状はどうであつたらうか。——会長は時の高等法院の長老ヴィット (Vitte) であつた。けれどもヴィットは頑固な法律屋で、およそ文学科学に理解がなく、就任前からアカデミーに反感と憎悪を示し、いづれこれを廃止してその経費を長老の地位に結びつけようと考えていた。そしてかれはアカデミーの本拠プーフィエ館に乗りこむと、さつそく自分は「ライオンの分前」をとつて、アカデミーのためにはほんの廂をかすにすぎなかつた。リュフェーは当時のアカデミーの会場をこう敍している。

「古びたベルガメ織を張つた薄暗い広間、同じ綴織のボロで被われた切込煖炉、そしてそこからしよつちゆう吐き出される煙で黒ずんで天井、また固くて座り心地がわるく、よほどの時代物と思われる木製の肘掛椅子、これがヴィット氏によつてブルゴーニュのミュージズ達にあてがわれた住居と備品であつた。この陋屋が二十年間かれらの殿堂だつたのだ。……」

会場はこういう有様であつたが、しかしアカデミーの例会は非常に規則正しく開かれた。例会は、クリスマスと復活祭と五旬節の週間とそして秋季の休暇を除いては、定款の規定通り毎週金曜日に開かれた。そして大部分の有給会員と二、三の普通会員と一人の幹事(大い会長)あるいは名誉会員が出席して、研究発表が行われた。

例会で研究発表をするのは有給会員の義務であつた。かれらはこのために創立者の遺産によつて給付をうけ、事実上このアカデミーの主体をなしていたのである。こころみに一七五〇年における十二名の有給会員の顔ぶれをみると、——物理部門には医師ロード (Raudot) 同ノールニユ (Fournier) 同シャルドン (Charadenon) およびリエボー師 (Tabbé Liebaut) 医学部門にはシヨールニユ (Chaussier) トラメル (Melot) マレ (Maret) オアン (Hoin) の各医師、——道徳部門には弁護士ペレル (Perrel) 同フロアジヨ (Fromageot) 同ギヨ (Guyot) および元弁護士で王室代訴人のジェル (Gelot) がいた。そしてこれらの有給会員はいづれも年齢が若く、大抵四十歳にみたかつた。なかにはごく若いものもいた。たとえばルソーに関係のある道徳部門の会員について見れば、クロード・ペレは三十歳、ジャン・バチスト・フロマジヨは二十六歳、ルイ・ギヨは二十五歳、クロード・シユロは三十三歳であつた。

このように年齢からいつても、このアカデミーの主流はまだ学識経験にとぼしく、世にでる機会もなく、職業的な文学者や科学者から遠かつた。また経済的にも時間的にも余裕がなく、かれらは日々の生活に追われ、その余暇にアカデミーへ顔を出す程度の、いわば「アマチュア」だつたのだ。——

要するに、当時のアカデミーの状態はアカデミー本来の使命を果すどころでなく、却つて無智、怠惰、失望など、学問芸術の敵によつて喰いつくされようとしていたのである。

☆

けれども一七五〇年におけるディジョン・アカデミーは、他面において、一つの著しい特質をもつていた。それはこの



団体が陣容からも精神からもほとんど完全にブルジュア的であつたということだ。そしてこのこともまたプーフィエ氏の課した定款の宿命的な結果であつた。高位高官の人々は自分より下級の幹事の指導下に入ることをいさぎよく思わなかつた。アカデミーの会員達も上級の人士と同僚となり、かれらの身分や財産によつて圧迫されることを好まなかつた。また名譽会員といつても大い身分の低い人々で、これもおのづから上層階級を忌避したのであつた。その上、幹事や会員の  
あるものは、創立以来、高等法院の要職者と個人的に不和確執の状態にあり、そのため人選においてある種の感情的な政  
策がとられたことも察せられる。

いづれにしてもディジョン・アカデミーの陣容は、ブルジュアジーが絶対優勢であつた。そしてこれはフランスの他の  
いかなる學術団体にも見られぬ特徴であつたが、ここではさらに明確な敵対の様相を呈していたのである。——  
ディジョン・アカデミーの会員達——弁護士、医師、司祭などは、すべて（正確に言えば名譽会員ランタン・ド・ダム  
ネーを除いては）身分の低い人々であつた。したがつてかれらは、人間が粗野で不法で反抗的で、要するにアリストク  
ラシーから見れば我慢のならぬプレベイアンであつた。リュフェーはいつている。

「有給会員団を構成している連中は、ほとんどすべてかれらがうけた粗雑な教育のあとを多少とも留めている。精  
神に高揚もなく、感情に高貴もない。かれらは礼儀と感謝の念にかけている。いくらか才能があると思つている  
連中は嫉妬ぶかくて頑固で、傲慢不尊で、この上もなくつき合にくい。」

このリュフェー氏の言葉には多少誇張がないではないが、しかしディジョンのアカデミアンが、家柄、財産、教育な

どによる特権者にたいして嫉妬や怨恨をいなく階級の性格感情を具えていたことは確かである。

\* Lantin de Damerey. ランタン家はブルギーニュの名門。父 Claude Lantin はアカデミーの初代会長、叔父 J.-B. Lantin も高等法院の評議官で中央でも知られた文学者であつた。

また学問的関心からいつても、かれらはいくまでブルジュアであつた。かれらは在来の貴族的ユマニスムに背をむけて、古典の註釈や考古学的研究よりも実用の学をえらんだのだ。そしてこれには十分な時間もなければ蔵書もないという現実的理由もあつたが、また当時フランスならびにヨーロッパに勃興していた実証科学の風潮に、ブルジュア特有の実用精神が影響されたことも考えられる。

いづれにしても一七五〇年におけるディジョン・アカデミーでは、実用科学がもつとも重視され、その研究は学問の蘊奥とか一般的な理論体系をさけて、もつぱら「アマチュア」にも手のとどく実験や観察に終始していた。つまり創立者ブーフィエ氏の遺書にうたわれた「人間に有用な問題」を離れず、医学は健康を保護し、物理学は自然の力を支配し、道徳学は社会を維持すればよかつたのだ。けれども、道徳の問題はこのアカデミーの特につよい関心事であつた。そしてその部門の会員はもちろん、他の会員によつても非常に熱心に討議されたのであつた。

道徳の問題であれば、別に大した博学多識を必要としない。中学校の勉強でもすでに下地ができていし、古典作家は適切なモデルや引用句を提供してくれるし、第一、常識があれば誰でも多少の意見をのべることができる。まして法廷や説教壇で演舌になれた弁護士や司祭ならば、人間の幸福や善徳について論じることには決して困惑しなかつたであらう。け

れども道徳問題の関心には、こうした利便のほかにも、もつと切実な深い理由があつた。そしてその理由はまたかれらの置かれた社会的地位につながっている。

ディジョン・アカデミーの人々が上層階級にたいして敵意をいだいていたことは前にものべたが、その対象は決してフランス国家の支配者とかまたその政治制度ではなかつた。かれらはそうしたものの圧迫を身を感じるためには、思想的にも地理的にもあまりに遠くにいたし、また実際王政そのものには何ら悪感情をいだいてはなかつたのだ。かれらが憎悪していたのは、ヴェルサイユの住人ではなく、地方のアリстокラシーであつた。日常出くわす大官貴族は、財産や身分を鼻にかけ、礼儀作法や威厳を誇示したばかりか、その行状によつて特にかれらの心を傷つけたのである。

実際、こうした特権階級は、地方生活の退屈をまぎらわすためにあらゆる慰樂に耽つていた。饗宴、舞踊会、サロンの会話、また夏季には諸方の城館を訪れるなど、現世の快樂を求めてやまなかつた。しかもかれらはこれをすこしも隠そうとはしなかつたのだ。ところがブルジュア階級は、奢侈の腐敗と極貧の墮落との中間にあつて、よき市民、よき家庭人として日々の仕事にはげみ、正直、信仰、勤勞などの諸徳を尊重し、かつこれを実践していたのだ。そしてそれだけ一層、財産や地位ある人々の悪徳を憎み、才智、優雅、洗練などの貴族的資質よりも人間本来の心情の美質を愛していたのであつた。

こうしてディジョン・アカデミーでは特に道徳の問題がやかましく論議された。そしてしばしばなにかの善徳が「村の

司祭」のお説教のように推賞された。というのは、このアカデミーの会員達は、地方の保守的な、あるいは反動的な知識人として、遠い古代からの伝統的モラルを出でなかつたのだ。かれらはそうした伝統的モラルこそ人間行動の原理であり、また社会秩序の基盤であるとかたく信じ、財産や権力や才能もこのモラルの許容する限りにおいて尊重さるべきものと考えていた。したがつてかれらが当代社会の風俗に眼を転じて、そしてそこに新しい変化を見、この変化あるいは進歩が果して人間生活に幸いするかどうかをたづねた時も、判断の規準は当然この伝統的モラルであつた。

このことについて一、二の例をあげるならば、——たとえば一七五〇年度の道徳賞の審査委員会の会長として、このアカデミーの裁定にもつとも權威のあつた名誉会員ランタン・ド・グムネーは、すでに一七四三年「自然法」を論じてこういつている。

「われわれは制定法よりも自然法を尊重し、そしてこう主張してもよき市民たり忠誠な臣民たることをやめるものではない。すなわち、その原理において根元的で単純で、つねに不変不易、確乎不動で、キケロによれば、万人の心のなかに神の御手によつて刻まれた法、道義への愛によつて罪のおそれを鼓吹する法こそは、脆弱さの永遠の証拠ともいふべき改変更新によらねば秩序を維持することのできない法律よりもずっと完全なのである。」(ブーシャル氏の著、七十六頁)

またこの委員会の有力な委員であつた有給会員フロマジヨは、一七五三年「趣味の墮落は風俗のそれに伴う」という論文でモンローバンのアカデミーから賞をうけたが、その中でこういつている。

「風俗の墮落は一国民にとつて公共の災禍だ。貞潔と礼節を蹂躪し、祖国と公益への愛を喪失した人民から、一体いかなる美德、いかなる成果を期待しよう。……——風俗の紊乱はすべての腐敗の決定的要素だ。それは諸芸術の上にひろがり、その目的を転換し、思うままにこれを変形させ、墮落させる。ついでその芸術を修行する才能を萎縮させ、冷却させる。……——腐敗に落ちこんだ人々は、かれらの幸福をつくるべきものを身の破滅のために逆用する。……文学芸術は人を教えることをやめ、人の氣にすることを限度とした。そして腐敗した人心を喜ばすためには、その情欲を養い、あるいはその無節操に媚びなければならぬだろう。文学芸術が奴隷となつて背負わされたのは、この破廉恥な役目なのだ。」(同著、七)

\* 一七五〇年度の道徳賞の審査委員会は三名の名譽会員と道徳部門所屬の四名の有給会員によつて構成された。すなわちランタン、ドゥルバ、レオーテとジュロ、フロマジヨ、ギヨ、ペレの計七名である。なおルソーは当選後ランタンへは特に感謝の意を表している。

自然法や良心を尊重し、文弱の風潮を嘆くこうした言葉は、疑いもなくルソーのものだが、これはまたキケロやセネカに鼓吹されたもので、古来多くのモラリストや説教者のお題目であつた。けれども十八世紀の中期においては、こうした永遠の真理は特殊の意味をもつていた。というのはこのころフランスの社会機構はすでに解体期にあり、働くものの経済的困難は富裕階級の奢侈と放逸を一層にがにがしく思わせていたのであつて、こうした真理は時代の関心にこたえ、これを強調することは正直な貧しいブルジョアジーのために貴族大官の輕蔑にたいして復讐することであつたのだ。

けれども、ディジョンのアカデミシアンのこうした道徳的宣言には、急進的な革命思想はすこしも含まれていなかった。国家社会を顛覆することなどはまったく思いの外であつた。ただかれらはそうすることによつて、いわば当面の敵、地方の大官貴族への鬱憤をはらし、もしできるならば、社会を古代道徳の地盤の上にかためて、古来の風俗、信仰を保持しようと考えていたのだ。そして外部にたいしては、アカデミシアンの責任において、社会道徳の審判者となり、よき市民、よき臣民として判断することを証明したかつたのである。

このように見てくれば、一七五〇年におけるディジョンのアカデミーには、ルソーの思想、感情、またその口調をさえ受けいれる雰囲気が支配していたことは容易に察せられる。「キケロの学校」で育つたこの地方小都市のアカデミシアンとあのカルヴァンの町に生れてプルタルクに導かれたジャン・ジャックとの間には、ほとんど距離はなかつたのだ。ただ前者は王国の臣民としてその政治的限界をまもつたが、後者は共和国の市民としてそれ以上のことをなしたに過ぎなかつた。このことについてマルセル・ブーシャル氏は、まことに適切な言葉をのべている。

「自己の階級の義務と宗教に愛著し、出生、教育、作法、知識の優越性を嫉視し、貴族社会の誇示する風俗と思想の放縱にたいしてまじめに憤慨している地方のブルジュアと、そして高位高官にたいして憤激し、単純簡素に熱中し、追憶と夢想のなかで理想化されたジュネーヴへの郷愁に悩まされているプレベイアンとの間には、憧憬と怨恨とある種の共通性のみとめられる。たしかに、ディジョンのアカデミシアンは、思想革命の口火を切るどころでな

く、ただ自明かつ必要な真理を呼びもどし、これを復権させるのだと考えていたのだ。かれらは中学校のベンチでラテン文学によつて親しんだ思想に賛意を表したのである。しかしルソーもまた一つの伝統をうけついでいた。かれがその雄弁で燃えあがらせた思想感情は、かれが生れた環境に、かれの祖国の厳格な、半ば族長的な風俗のなかに、かれの宗教教育のなかに、古代の追憶のなかに、またかれを辱しめた富者や権力者に復讐してわれとわが身に威厳をあたえたいという秘かな願望のなかに起源を發していたのだ。アカデミーを指導していた司法官やそれを構成していた弁護士や医師達の理想、それは趣味において単純な、生活において約ましく、行状において誠実な、信仰において堅固な、そして派手な才能によつて輝くよりも自己の日常の義務を果すことに懸念する団体である。この理想、これをルソーもまた心の奥にもつていたので。かれの作品のなかにこの理想を認めると信じたアカデミシアンは、全然まちがつてはいなかつたのである。」

こうして「無智と愚劣の宿」とまでいわれたディジョン・アカデミーは、ちようど創立十周年に、ルソーの天才の爆発に機縁をあたえ、史上に重大なエポックを画した。そしてこのことには、双方における諸事情の一致のほかには、偶然や盲目に帰せらるべきものは何もないのである。(未完)